

Title	多言語翻訳プロジェクトについて
Author(s)	合山, 林太郎
Citation	多言語翻訳 太宰治『黄金風景』. p.43-p.46
Issue Date	2012-11-15
oaire:version	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/32756
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

多言語翻訳プロジェクトについて

合山 林太郎

1. 多言語翻訳プロジェクトの背景

この本を手にとられた方は、「多言語翻訳」という聞きなれない言葉にとまどわれたかもしれない。また、内容をご覧になった方は、それが、日本文学・国語学研究室という、どちらかと言えば伝統的、保守的とみなされがちな学問領域において行われたことに驚かれたかもしれない。しかし、現在の日本文学関係の研究状況を見た場合、それは必然であるように、筆者には感じられる。どの大学の研究室にも、外国からの留学生がおり、しかも彼らの出身国や地域は、年々多様化しているからである。

現在、大阪大学の日本文学・国語学研究室には、専門的な訓練を経て日本文学について一定の知識と理解を持つ博士課程の学生が、多数在籍している。彼らは、通常、他の日本人の学生と同じように、日本語によって思考し研究している。それが、必須のものとして求められていると言ってもよいだろう。

しかし、彼らが持つもう一つの言語能力、すなわち、母語についての能力を用いるならば、通常の日本文学研究とはまた違ったかたちでの学術的貢献をなすことができるのではないか。とくに大阪大学の日本文学・国語学研究室の博士課程の学生の国籍は多様である。彼らに集まってもらい、日本文学の作品を自身の母語に翻訳してもらえば、翻訳言語の多さという点から考えても、あまり例を見ない成果を挙げることができるのではないか。そのように考えたのが、このプロジェクトが生まれるきっかけであった。

最終的には、一つの作品を、9名の留学生に参加してもらい、8つの翻訳を作成することとした。具体的には、英語、中国語（簡体）、中国語（繁体）、韓国語、ロシア語、タイ語、ヒンディー語、ウルドゥー語へと翻訳した。その中には、日本文学の翻訳作品がまだきわめて少ない言語も含まれている。

ただ、今日の大学院生は、自身の研究でも成果を出さなければならず、きわめて多忙である。通常、翻訳は、作者や時代背景について、十分に考究したうえで作業を進めるが、このプロジェクトにおいては、そうした時間をとることができない。そこで、翻訳担当者には、作品の解釈について議論し、認識を深めてもらい、また、彼らの理解を、日本人の教員や学生がサポートし、翻訳を行うこととした。短期間で作業を完了させることの問題点を、共同作業によって得られる知見により克服しようとしたのである。

2. 翻訳対象作品の選定について

多言語翻訳プロジェクトの経緯は、以上に述べたとおりであるが、翻訳対象作品は、太宰治『黄金風景』を選んだ。これは、その国や地域での一般の人々も読者にも興味をもって読んでもらえるような作品がよいと考えたこと、また、日本語教育や日本文学研究の入門に使用してもらうことを想定したことなどの事情による。このほか、欧米において、“日本的”と評価されるタイプの作品は避けたいという意識もあった。なお、著作権の問題がクリアされない作品は、あらかじめ候補から外している。

太宰の作品全体のなかで見ると、『黄金風景』はやや単純な作品と言えるかもしれない。ただ、その骨格が明瞭であるため、日本や日本語という枠を超えて、理解することが容易な作品とも言い得る。元々、『心の王者』などとともに、一般読者向けの雑誌などで紹介されることの多い本作品であるが、とくに、近年では、テレビ放映もされ(BUNGO・日本文学シネマ「黄金風景」(TBS 2010年2月15日放送))、注目を集めてもいる。

プロジェクトを進めるなかで、この『黄金風景』が、芥川龍之介『蜜柑』や魯迅『一件小事』¹と類似点を持っているのではないかという、興味深い指摘を、上海師範大学の張杭萍氏からいただいた。『蜜柑』においては、「私」が、列車から弟たちに蜜柑を投げる少女の行為を見て、「得体の知れない朗な心もちが湧き上つて来るのを意識」する。また、『一件小事』は、人力車に轢かれそうになった老婆を、車夫が助け起こし、交番へと連れてゆく様を見て、「我(私)」は稲妻に打たれたような衝撃を感じる。これらは、『黄金風景』において「私」がお慶の言葉によって涙を流すことと構造的に類似している。

すなわち、これらの3作品は、それまで注意を向けなかった人物の言動により、語り手(私)が救われる、あるいは、自身の問題に気付かされ、認識を改めるといった内容を持つという点で共通している。『黄金風景』は、このような、ある種の普遍的な型を持つ作品ともみなし得る。こうした点から見ても、本作品は、翻訳の対象として、妥当であったと考えている。

3. 多言語翻訳から見えること

以下、翻訳のための議論に参加するなかで感じたことについて記しておく。

通常、翻訳は、自国語と翻訳対象作品に用いられた言語との2言語の間を結びつなぐ行為であるが、本プロジェクトでは、複数の言語への翻訳を同時並行で行っている。結果として、様々な国や地域における日本文学との理解の様相を知り得たのは、この試みの一つの興味深い点であった。

¹ 『蜜柑』と『一件小事』の類似については、すでに成瀬 哲生「芥川龍之介の『蜜柑』と魯迅の『一件小事』」(『徳島大学国語国文学』4号、1991年3月)などに指摘がある。

たとえば、日本と距離的にも近く、言語や文化の点でも関係の深い、中国や韓国、台湾では、太宰作品の翻訳が一定数出版されており、台湾や韓国では、『黄金風景』そのものもすでに訳されている²。小説中に描かれた生活習慣なども、共通している場合が多い。

これらの国や地域の翻訳担当者は、自身の言語における太宰の受容の文脈を確かめながら、先行の翻訳との異同も意識しつつ、自らの作業を進めている。たとえば、本書所収の中国語（繁体）訳では、先行の翻訳に比べ、より直訳に近いかたちを採用し、日本語のニュアンスを正確に伝えることにつとめている。

一方、インド、タイ、ロシアなどの国々は、地理的にも、また、言語や文化の点でも、日本からは遠い。日本文学の翻訳に従事できる研究者は、決して多くはなく、読者も日本について具体的なイメージを抱くことが難しい。

また、こうした国々においては、日本への興味と日本文学への興味が重なっているという点である。具体的に言えば、日本文学作品が手に取られる場合、そこには、少なからず、日本の風俗や社会について知りたいという気持ちが働いている。

したがって、これらの国や地域の言語の翻訳担当者は、一つ一つの事象について丁寧に注釈を付けている場合が多い。たとえば、タイでは、家の入り口（そもそも玄関という概念が、タイにはない）で応接することをイメージすることが難しく、「私」が巡查と話をする場面を一般の読者に理解してもらうため、説明を付している。

なお、それぞれの言語での日本文学の受容及び翻訳状況については、附録資料に担当者の詳細な報告があるので、ご参照いただきたい。

4、『黄金風景』の読みと多言語翻訳

『黄金風景』について、どちらかと言えば単純な構造を持つ作品ではないかと述べたが、それでも、これまでにこの小説について、いくつかの興味深い解釈が提示されている。

一例を挙げよう。お慶は、結末において、「あのかたは、お小さいときからひとり変つて居られた。目下のものにもそれは親切に、目をかけて下すつた。」と、「私」をたたえ、そのことに「私」は涙する。お慶の無垢な心に「私」が救われると理解されることが多い箇所であるが、この部分の記述について、「私」が持っていた、自身の幼少時に関する記憶がそもそも歪んでおり（実際には、「私」

² 翻訳の有無については、国際交流基金ウェブページ内の「日本文学翻訳書誌検索」(<http://www.jpf.go.jp/j/culture/media/exchange/translationsearch.html>、2012年10月31日最終確認)、及び、『文学の翻訳出版－諸外国の政策比較および日本文学の海外普及の現状』（日本文学出版交流センター、2007年）を参照するとともに、各翻訳担当者が調査を行った。

は決してそれほど悪い人間ではなかった)、お慶の発言により、こうした記憶から、「私」は解放されたとする読みも提示されている³。

このような作品解釈とはやや趣きをことにするが、異なる言語・文化環境で読むことで可能になる、新たな評価というものもある。翻訳担当者のなかには、すでに自身の訳を母国での教育や紹介に用いている者もいるが、たとえば、ロシア語訳の担当者が、自身の訳をロシアの大学の日本学専攻の学生に読んでもらったところ、本作の結末における「私」の反応がいかにも日本人らしいといった意見が提出されたという。

『黄金風景』末尾において、「私」がお慶の言葉に心を揺さぶられるわけであるが、その感動は、「私」のなかで反芻されるのみであり、お慶たちに感謝の念を伝えるなどの具体的な行動に、「私」を駆り立てることはない。このような静的な作品の閉じられ方を、その学生は、特異に感じたとのことである。

日本近代小説における私小説的伝統を鋭く嗅ぎつけた発言とも言えそうであるが、今後も、多くの国や地域の人々の目に触れるなかで、様々な評価がなされてゆくものと考えられる。

5. 多言語翻訳の可能性

筆者は、今回全体の進行を調整し、また、作品理解や時代背景についてサポートする役割を担ったが、作業を通じて多くのことに気付かされた。すでに述べた外国における日本の文化慣習に対する理解と作品読解との関わりという問題は、その一つである。このほかにも、たとえば、「うすみつともなく」という語は「みつともない」とどう違うのか、あるいは、「けはしい興奮」という語の意味するところなど、言葉の細かな用法やニュアンスに関する質問を多く受け、これまで自身が、非母語話者が抱くこうした疑問に対して、十分に考慮していなかったことを痛感した。日本文学の教育に従事する日本人が、普段、自覚することのない言葉に対する感覚を確認する手段としても、作品を共同で多言語に翻訳することは有効である。

翻訳を通じた日本文学の海外での受容については、近年、注目されており、その研究も盛んであるが⁴、翻訳そのものに積極的に関わることによって、日本文学研究は、さらに豊かなものになるのではないかと考えている。

³ 細谷博『太宰治』(岩波新書、1998年)。なお、『黄金風景』の研究史については、田中良彦「『黄金風景』論」(『武蔵大学人文学会雑誌』36巻3号、2005年1月)を参考にした。

⁴ 柴田元幸・沼野充義・藤井省三・四方田大彦編『春樹をめぐる冒険—世界は村上文学をどう読むか』(国際交流基金、2006年)、張競『海を越える日本文学』(筑摩書房、2010年)。